

カントと非ヨーロッパ世界

山根 雄一郎

老カントから託された手稿をリンクが編集してなった『自然地理学』（1802年刊）第3部は「ヨーロッパ」の地誌を含み、そこには「ヨーロッパ圏内のトルコ、ブルガリア」・「ギリシア」・「ハンガリー」・「イタリア」・「フランス」・「スペイン」・「ポルトガル」・「スウェーデン」・「ノルウェーおよびフェロー諸島・アイスランド」・「ロシア」の見出しがある（IX 421-427）。以上は、青年カントが「1757年から1759年にかけて」自ら仕上げた「自然地理学」講義の草稿に遡る「ホルシュタイン手稿」（XXVI₁ XXXV〔W.Stark〕）における見出し（XXVI₁ 288-299）にほぼ合致する。その情報源は主にビュッシングの2巻本『新地理学』（1754年初刊）とみられる（XXVI₁ 288, Anm.814）。同書はカントの立項しない「ブリテン諸島」・「デンマーク・プロイセン・ポーランド」などの記述も含む（ebd.）。これらの地名の覆う範囲がカントにとってのヨーロッパ世界であったとも言えるかもしれない（典拠はアカデミー版全集の巻数・頁数により示した）。

カントの思考と「非ヨーロッパ世界」との関わりが追究された本共同討議では、まず、上述の「ヨーロッパ世界」に対置される意味での「非ヨーロッパ世界」にある中国の哲学を専攻する井川義次氏（本協会外より招聘）が「啓蒙期ヨーロッパにおける儒教情報の流入」について提題され、当代における「東洋哲学のヨーロッパ西漸」の趨勢の中でカントも「哲学的方法」に関して「中国的思考」に接した可能性を指摘された。次いで、ドイツ思想史を専攻する笠原賢介会員が「多声的思考の系譜——レッシング・ヘルダーからカントへ」と題し、「ヨーロッパのなかの非ヨーロッパ」や「ヨーロッパと対峙する非ヨーロッパ」を主題化した思想家との比較も交え、「「世界」の住人のすべてに向かう普遍的な〈交際〉の理念」を説いた批判期のカントに注目された。

フロアとの間にも2件の質疑応答が交わされ、総じて時間不足が惜しまれたが、今後のカント研究を裨益する知見が示された意義深い共同討議となったと思われる。両提題者と参加会員各位に謝意を表したい。井川氏には、本協会元会員の故石川文康氏との共編著『知のユーラシア1 知は東から—西洋近代哲学とアジア—』（明治書院、2013年）があり、同書に石川氏の「排中律を超えて—ドイツ古典哲学と中国哲学の間」が遺稿として収録されていることも、あわせて紹介しておきたい。